「日々の理科」（第 2499 号） 2021,-5,17

「ぎりぎりの虹（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

今日は梅雨前線の影響か、一日中風が強く、はっきりしない天気だった。湿度も高く、非常に蒸し暑い一日だった。太陽光を見なかったような気がするが、夕方になって、校舎内にまぶしい「黄金色の光」が射しこんできた。私は小学校の屋上に出てみることにした。

西の地平線近く、池袋の方角に太陽が少しだけ見えた。夕焼けを創る層積雲（正確には「雨層積雲」）のわずかな隙間から太陽が覗き、その光が校舎内まで届いたのだ。

太陽光は西側から射しているので、小学校の東側（茗荷谷方向）にある建物には、太陽光が射している。しかし、小学校の屋上には雨が降っていた。こういう気象条件の時には、虹が出やすい。ただ、この時点では虹は懸かっていなかった。私は屋上の端にある、雨が当たらない庇の下で、虹が出るのを待つことにした。「虹が出る一瞬」とはどんなものなのだろうか？

待つこと 10 分、西側の跡見学園の塔の近くの空が、薄く色づいているのがわかった。虹だ！ついに、虹が現れる一瞬を目にすることができた。

最初、ほとんど気づかないほど淡かった虹の色が、だんだん濃くなってきた。ここまで色がついてくれば、誰でも「あ、虹だ！」と気づくだろう。

驚いたことにこの時点では、西側の太陽は、すでに沈んで見えなくなっていた。恐らく「虹の出ている空間」では、まだ雨粒に太陽光が当たっているのだろう。太陽が沈みかけている時に現れた、まさに「ぎりぎりの虹」である。